

三重県名張市におけるエコツーリズムの課題と可能性

保坂 真 秋田県男鹿市立北陽小学校
河本 大地 奈良教育大学社会科教育講座 (地理学)

Ecotourism in Nabari City, Mie Prefecture : Its Problems and Possibilities

HOSAKA Makoto

(Hokuyo Elementary School, Oga City, Akita Prefecture)

KOHMOTO Daichi

(Department of Geography, Nara University of Education)

Abstract

Challenges and possibilities of ecotourism in Nabari City, Mie Prefecture is examined in this paper. Nabari is located in the suburb of the Osaka metropolitan area and has natural tourist resources such as Akame 48 Waterfalls. From the comparative study among the organizations certified under the Ecotourism Promotion Act in Japan and the survey of local residents, related organizations, and ecotours in Nabari City, involvement of local residents and public awareness of ecotourism were identified as major problems of ecotourism in Nabari.

キーワード：エコツーリズム, 持続可能な開発,
地域住民, 赤目四十八滝

Key Words : Ecotourism, Sustainable development,
Local resident, Akame 48 Waterfalls

1. はじめに

本研究の目的は、三重県名張市におけるエコツーリズムの課題と可能性を明らかにすることである。

1980年に国際自然保護連合 (IUCN)、世界自然保護基金 (WWF)、国連環境計画 (UNEP) が3者合同で著した「世界環境保全戦略」において「持続可能な開発」が提唱された (真坂・石森・海津 2011)。「持続可能な開発」とは、開発は環境や資源の土台の上に成り立つものであって、持続的な発展のためには、環境保全が必要不可欠とする考え方である。この「持続可能な開発」のひとつに、エコツーリズムが挙げられる。その定義は様々であるが、自然環境への影響に配慮しつつ楽しむことがエコツーリズムでは可能である (敷田・森重 2011)。

エコツーリズムが最初に提唱されたのは、1982年に国際自然保護組合 (IUCN) が第3回世界国立公園会議において、これを議題に取り上げ、「自然保護の資金調達機能として有効」とされた時である (川崎・三部 2015)。それまでも存在したマスツーリズムでは、観光地での混

雑やごみ問題、自然環境の破壊、地域文化の変容、地域外への利益の漏出など「観光公害」と呼ばれる悪影響が顕在化していた (敷田・森重 2011)。そうした中で提唱されたエコツーリズムは、「持続可能な開発」の手段として世界に広まった。

エコツーリズムの概念が日本に取り入れられたのは1990年前後であり (森重・高木・宮本 2008)、1990年代後半から全国に広がった。日本でのエコツーリズムが「持続可能な開発」であることを証明する研究は複数ある。たとえば、敷田・森重 (2003) は、エコツーリズムを「自然環境に与える負荷を最小限にしながらそれを体験し、観光の目的である地元に対して何らかの利益や貢献のある現象」とし、「持続可能なエコツーリズムを創出するためのサーキットモデル」の提案と、それを応用した、地域におけるエコツーリズムの創出プロセスを示した。川崎・三部 (2015) はエコツーリズムを「環境保全と観光振興と地域活性化を同時に実現する重要な政策」とし、エコツーリズムを推進する上では、多様な主体の連携による「地域推進組織」の設立、その組織の「構

想・計画作成機能」と「マネジメント機能」の発揮を可能にする制度的・財政的・人的な諸条件を整備・充実することが必要だと述べた。松永（2015）はエコツーリズムが「観光振興を通じて、環境保護に寄与しつつ地域経済の活性化を実現することが期待できる持続可能な取組であり、地域再生のために効果的な取組である」とし、自然環境保護、地域振興、林業振興、観光振興、震災に対する安全・安心の確保という多面的課題を解決することが可能なエコツーリズムとして「木で囲まれたエコタウン」構想を提示した。

こうした中、2003年度に環境省が設けた「エコツーリズム推進会議」とそれに続くモデル事業3ヵ年計画を大きなきっかけとして、全国でエコツーリズムに対する関心と取り組みが一気に進んだ（真坂・石森・海津2011）。それまでは、小笠原や西表島、屋久島、北海道のような典型的な自然地域がエコツーリズムに取り組んでいたが、この会議をきっかけに既存観光地や里地里山など、さまざまな地域が導入を図るようになった。2007年には「エコツーリズム推進法」が制定され、2020年までに18の地域が認定されている。

エコツーリズムを推進している地域のうち、大都市から離れた地域で行われるエコツーリズムについての研究は、小笠原諸島を事例とした石原・小坂・森本・石垣（2010）、山崎（2016）、中井（2002）、奄美大島を事例とした宋（2017）、宮島を事例とした浅野（2002）、屋久島を事例とした佐山・西田（2000）、沖縄県を事例とした宮内（2003）、市田・林・細谷（2005）など数多い。一方で、大都市近郊で行われるエコツーリズムを対象とした研究は不足している。大都市近郊地域は、ベッドタウンにみられるような都市的性格と、農山漁村地域としての性格の両側面を有しており、エコツーリズム推進の全国的モデルとなりうる。また、大都市近郊でのエコツーリズム推進は、より多くの人々にエコツーリズムを知ってもらい関わってもらうことにつながる。

大都市近郊で行われるエコツーリズムを対象とした研究には、埼玉県飯能市を事例とした中岡（2018）と平井（2018）がある。中岡は、エコツアー実施者としてエコツーリズムに携わる地域住民と飯能市エコツーリズム推進協議会に関する調査から、地域づくりのために進められるエコツーリズムの意義と問題点を明らかにした。平井は、飯能市エコツーリズム推進協議会とエコツアー実施団体に着目し、飯能市のエコツーリズムが進む方向性について考察した。これらの研究は、エコツーリズムに関わる団体やエコツアー実施者といった、エコツーリズムに直接的に関わる機会が多い地域住民に対する調査が充実している。しかし、エコツーリズムに関わる機会の少ない地域住民への視点には乏しい。また、両研究ともに、他地域と飯能市の比較・検討が行われていないため、

飯能市のエコツーリズムの特徴が明確になっていない。

そこで本稿では、三重県名張市を事例として、エコツーリズム推進全体構想が国から認定された団体間での比較・検討、名張市エコツーリズム推進協議会等の関係団体やエコツーリズムに関わる機会の少ない地域住民への調査から、名張市のエコツーリズム推進における課題と可能性を明らかにする。研究対象地域の主要な選定理由を以下に示す。第一に、大阪市から約60km、名古屋市から約100kmの位置にあり（図1）、飯能市と同様に、大都市近郊でエコツーリズムを推進している地域である。第二に、名張市エコツーリズム推進全体構想の「目指す地域の姿」において、地域住民の視点が取り入れられていることから、地域住民がエコツーリズム推進の中で果たす役割が大きいと考えられる。第三に、赤目四十八滝をはじめとする自然観光資源を魅力とした観光スポットの多くで観光レクリエーション入込客数が減少していることから（図2、表1）、自然観光資源を活かす手段であるエコツーリズムに課題があると考えられる。以上3点から本研究に適切な事例地域と考える。

次に研究方法を示す。中岡（2018）と平井（2018）を参考にし、エコツーリズム推進の中心となる名張市エコツーリズム推進協議会、エコツアーやイベントの企画・実施等で名張市のエコツーリズムに関わる赤目四十八滝渓谷保勝会といった関係団体についての調査と、エコツアーについての調査を行う。名張市エコツーリズム推進協議会については委員へのアンケート調査を行った。赤目四十八滝渓谷保勝会についてはゼネラルマネージャーに対してアンケート調査と、2020年1月3日に聞き取り調査を行った。エコツアーの調査についての分析には、名張市エコツーリズム推進協議会が作成した名張市エコツーリズム推進協議会（2018）および「令和元年度事業計画」を使用した。これに加えて中岡（2018）と平井（2018）で不足している、他地域との比較・検討とエコツーリズムに関わる機会が少ない地域住民への調査を行う。他地域との比較・検討にはエコツーリズム推進法で認定された団体の、エコツーリズム推進全体構想を使用した。地域住民に対しては、名張市で無作為に50人に聞き取り調査を行った。

2. 名張市エコツーリズム推進全体構想の特徴

2.1. 名張市エコツーリズム推進全体構想の内容

名張市エコツーリズム推進全体構想（以下、名張市エコツーリズム推進協議会2014）の構成は、「I はじめに」「1. エコツーリズムとは」「II エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項」「1. 推進の背景と目的」「2. 現状と課題」「3. エコツーリズム推進の基本方針」「4. エコツーリズムを推進する地域」「III エコ



図1 名張市と大阪市・名古屋市の位置関係

地理院地図より作成。名張市と大阪市・名古屋市の距離は名張市エコツーリズム推進全体構想の記述を参考にした。

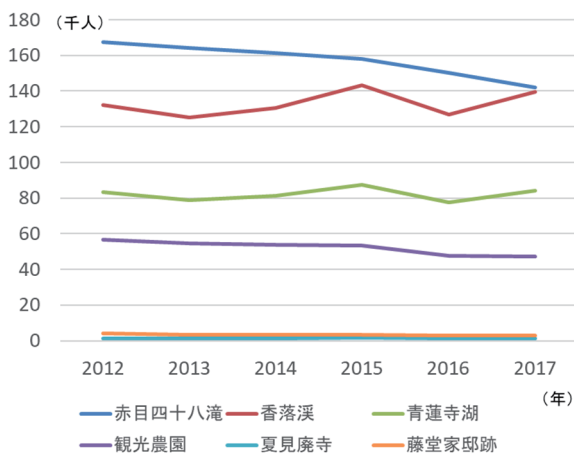


図2 観光レクリエーション入込客数の推移
名張市（2019）より作成。

ツーリズムの主たる対象となる自然観光資源「1. 動植物の生息地又は生育地その他の自然環境に係る観光資源」「2. 自然環境と密接な関係を有する風俗習慣その他の伝統的な生活文化に係る観光資源」「3. その他の観光資源」「IV エコツーリズムの実施の方法」「1. ルール」「2. プログラムの実施について」「3. 自然観光資源のモニタリング」「4. エコツーリズムによる情報発信」「5. ガイドなどの育成又は研鑽の方法」「V 自然観光資源の保護及び育成のために講ずる措置」「1. 自然観光資源の保護及び育成の方法」「2. 関係法令」「3. 他の法令や、関係法令に基づく各種計画との整合」「VI 協議会に参加する者の名称及び役割分担」「1. 推進協議会に参加する者の名称等」「VII その他エコツーリズムの推進に必要な事項」「1. エコツーリズムの着実な推進」「2. 環境学習の視点を大切にしたエコツアー実施にあたっての留意点」「3. 関係法令」「4. 地域住民等との連携」「5. 地域の生

活への配慮」「6. 安全管理」「7. 全体構想の公表」「8. 全体構想の見直し」となっている。この中からエコツーリズム推進の土台となっていく箇所について述べる。

名張市のエコツーリズム推進によって目指す地域の姿は『「おおきに」地域の宝で広げる笑顔の輪』である。これは、地域住民及び観光客双方の視点にたって表現されたものであり、「おおきに」「地域の宝」「広げる」「笑顔の輪」の各言葉に想いが込められている。「おおきに」は地域住民にとってはエコツーリズム推進による観光客や地域活性化への感謝の想い、観光客にとってはエコツアーの企画・提供への感謝の想い、そして互いにエコツアーを通じて自然環境への感謝の想いを共有したい旨を表している。「地域の宝」は、地域資源が、観光客及び地域住民双方にとっての宝である旨を表している。「広げる」は、エコツーリズム推進を契機として、地域住民が地域づくりの取り組みを広げること、観光客が名張の良さを口コミで広げることを表している。「笑顔の輪」は、地域住民及び観光客がエコツアーへの参画を通じて、地域資源を互いに再認識或いは発見し、地域住民は地域への誇りやおもてなしの心の醸成、観光客は歓喜や再来訪意欲の高揚などにつながることを表している。そして、これらを実現するための基本方針として「産業とエコツーリズムの提携」「地域とエコツーリズムと提携」「関連する取組と提携」の3つが定められている。基本方針に基づき、名張市の資源を掘り起こし、その資源を活かした体験型観光づくりを創出することにより、新たな地域産業の創出を同時に進めていくとされている。

上記では、地域住民に焦点を当てている。エコツーリズム推進において名張市は地域住民の参加を重視している。目標設定をすることによって、地域住民は目的を持ってエコツーリズム推進に関わることができる。また、エコツーリズム推進が最終的な目的ではなく、新たな地域産業の創出が目的となっている点も評価できる。エコツーリズムが推進される地域だけではなく、名張市全体の発展を視野に入れた目的としたプランとして理解することができる。

次にエコツーリズムの対象となる自然観光資源についてである。名張市エコツーリズム推進協議会の中では「対象となる自然観光資源（主なもの）」として地図上に示されている。図3に「対象となる自然観光資源（主なもの）」について示した。これらの自然観光資源は「動植物の生息地又は生育地その他の自然環境に係る観光資源」「自然環境と密接な関係を有する風俗習慣その他の伝統的な生活文化に係る観光資源」「その他の観光資源」の3つに分けられる。

図3から名張市南西部に自然観光資源が集中していることがわかる。これは「室生赤目青山国定公園」及び「赤目一志溪県立自然公園」がエコツーリズムを推進する地

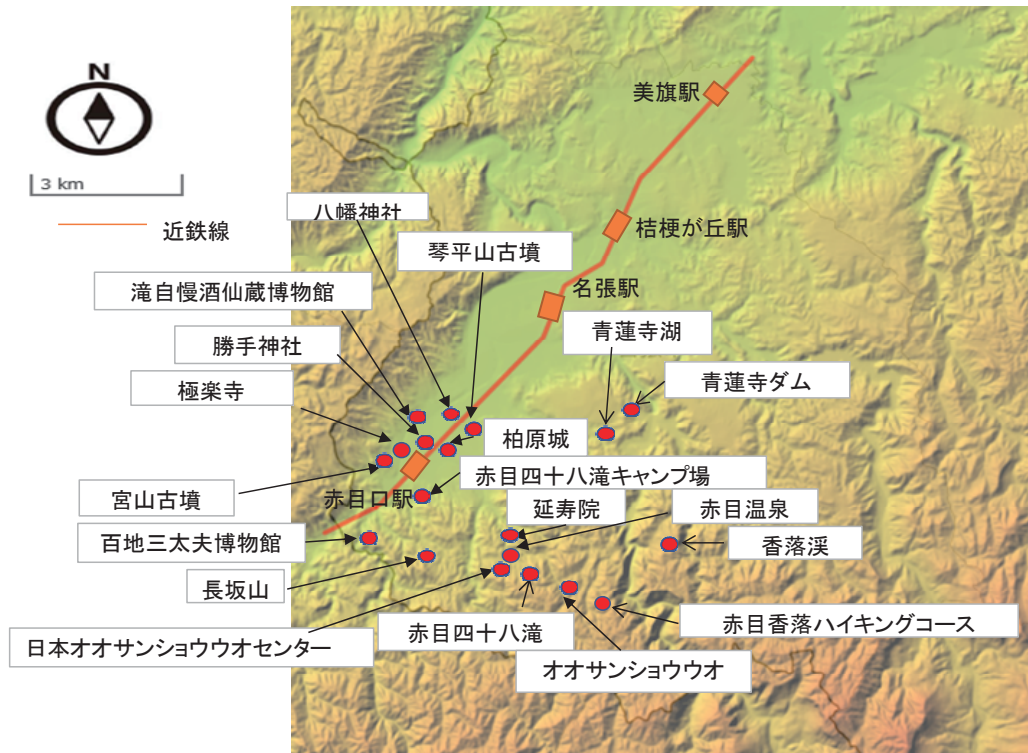


図3 対象となる観光資源（主なもの）

名張市エコツーリズム推進協議会（2014）の「対象となる観光資源（主なもの）」をもとに、地理院地図を用いて作成。

域として設定されているためである。しかし、エコツーリズムを推進する地域の中でも自然観光資源のかたよりが見られる。より広い地域でエコツーリズムを浸透させていくためにも名張市南東部での新たな自然観光資源の掘り起こしが必要だと言える。

次にエコツーリズム実施の方法についてである。まず、エコツーリズムの実施に当たって「ツアー参加者の安全」「自然（自然観光資源）の保全」「地域住民の生活環境及び史跡等の保護」「環境全般」「ツアーの質」の5つを保護する事項とし、ルールが定められている。「ツアー参加者の安全」については「ツアー実施者による安全対策の明示・説明、ツアー参加者の厳守」「ツアー実施者による参加者の安全確保、実施可否・参加者に注意喚起すべき事項の検討」「ツアー実施者による救急救命用品、飲料水等の準備検討、実施者自身の健康状態への注意」「ツアー実施者のスタッフ間での安全対策に関する情報共有」「ツアー実施者による傷害保険、賠償責任保険への加入、参加者への保険内容の説明」「推進協議会による、ツアー実施者への救命救急講習、保険制度の周知・説明会の実施」「推進協議会による緊急時の連絡体制・情報のツアー実施、関係団体への周知」「ツアー実施者の事前の現地確認による危険性の把握」が定められている。「自然（自然観光資源）の保全」については「動植物の観察で、生態・環境に負荷をかけないこと」「ツアー実施者による、野生動植物の生息・生育環境に悪影

響が出ない参加人数設定」「ツアー実施者による、動植物の捕獲、採取は行わないことについての参加者への説明」「推進協議会による、希少な動植物の生息・生育場所等の情報公開禁止」が定められている。「地域住民の生活環境及び史跡等の保護」については「ツアー実施者による、地域住民周辺・生活の場でツアー実施の場合での事前の地域住民への説明、農林水産業・土地所有者等との調和・連携」が定められている。「環境全般」については「ツアー実施者による、ツアーで発生するゴミの持ち帰り・分別」「ツアー実施者による、環境負荷の少ない製品や地産地消」が定められている。「ツアーの質」については「ツアー実施者によるエコツーリズムの基本的な考え方や全体構想の内容の理解」「ツアー実施者によるアンケート等の実施」「ツアー実施者の基本的接客マナーの取得」が定められている。

評価できる点は、ツアー参加者を強制するようなルール設定ではないことである。誰でも参加できるような状況ができており、ツアーの参加者増加が予想できる。

2.2. 名張市エコツーリズム推進協議会と推進法認定団体の全体構想の比較

全国には現在、エコツーリズム推進法で全体構想が認定された団体（推進法認定団体）が名張市エコツーリズム推進協議会を含め18ある。表1に、研究開始時に認定されていなかった宮島エコツーリズム推進協議会以外の

表1 エコツーリズム推進法認定団体の詳細

団体名	認定年	エコツーリズムを推進する地域	都市からの距離
飯能市エコツーリズム推進協議会(埼玉県)	2004年	飯能市全域	東京都心から50km
渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会及び座間味村エコツーリズム推進協議会(沖縄県)	2012年	渡嘉敷村、座間味村	那覇市から20～40km
谷川岳エコツーリズム推進協議会(群馬県みなかみまち)	2012年	上信越高原国立公園を含め谷川岳東面、朝日岳、白毛門の東面など	東京都心から150km
鳥羽市エコツーリズム推進協議会(三重県)	2014年	鳥羽市全域	津市から約50km
名張市エコツーリズム推進協議会(三重県)	2014年	室生赤目青山国定公園、赤目一志峡県立自然公園	大阪から60km, 名古屋から100km
南丹市美山エコツーリズム推進協議会(京都府)	2014年	南丹市美山全域	京都市から約27km
小笠原エコツーリズム推進協議会(東京都)	2016年	父島、母島、鷺島、小笠原諸島20マイル	東京から約1000km
てしかがえこまち推進協議会(北海道川上郡)	2016年	弟子屈町全域、津別峠、美幌峠、藻琴峠、藻琴山	札幌市から約256km
上市まちのわ推進協議会(富山県)	2017年	上市町全域	富山市から15km
愛媛県石鎚山エコツーリズム推進協議会	2017年	西条市、久万高原町	松山市から約70km
串間市エコツーリズム推進協議会(宮崎県)	2017年	串間市全域	宮崎市から約49km
奄美群島エコツーリズム推進協議会(鹿児島県)	2017年	奄美群島全体	鹿児島市から約371km
檜原村エコツーリズム推進協議会(東京都)	2018年	檜原村全域	八王子から24km、上野原から26km、あきる野から15km
下呂市エコツーリズム推進協議会(岐阜県)	2018年	下呂市全域	岐阜市から約60km
赤城山エコツーリズム推進協議会(群馬県沼田市)	2018年	赤城山山頂囲む外輪山(前橋市域)と荒山、鍋割山	東京都心から約140km
阿蘇ジオパーク推進協議会(熊本県)	2019年	阿蘇市、南阿蘇市、高森町、南小国町、小国町、産山村、西原村、山部町	熊本市から約42km
吉野川紀の川源流ツーリズム推進協議会(奈良県吉野郡川上村)	2019年	川上村全域	奈良市から約48km

環境省ホームページ、各団体のエコツーリズム推進全体構想より作成。都市からの距離は、環境省ホームページ、各団体のエコツーリズム推進全体構想に記載がある場合は引用し、記載がない場合は都道府県庁所在地との距離を地理院地図にて計測した。

推進法認定団体の認定年、エコツーリズムを推進する地域、都市からの距離について整理した。都市からの距離については、環境省ホームページ、各団体のエコツーリズム推進全体構想に記載がある場合は引用し、記載がない場合は都道府県庁所在地との距離を地理院地図にて計測した。また表2には国勢調査をもとに推進法認定団体の2015年の人口を示した。

表1・2から都市からの距離が約60km以内かつ人口が10000人以上という点で飯能市エコツーリズム推進協議会、鳥羽市エコツーリズム推進協議会、上市まちのわ推進協議会、串間市エコツーリズム推進協議会、下呂市エコツーリズム推進協議会の5団体が名張市エコツーリズム推進協議会と共通していることがわかる。以下ではこの5団体と名張市エコツーリズム推進協議会の全体構想の比較を行う。

まず、着目した点は各団体の「エコツーリズム推進における課題」である。各団体の推進全体構想の「推進に当たっての現状と課題」(名張市エコツーリズム推進協議会(2014)は「現状と課題」)をもとに、表3に課題を整理した。

名張市の課題は3つ示されており、すべてエコツアー

に関するものである。一方、名張市以外の5団体は、課題としてエコツアー以外の内容のものが示されている。エコツアー＝エコツーリズムという認識は誤ったものであり、名張市の課題設定は誤った認識につながるとともに、エコツーリズムに含まれるエコツアー以外の内容の質の低下につながる。そこで参考にするべき課題は飯能市エコツーリズム推進協議会(2009)の「③より多くの住民が関わりながら、エコツーリズムを継続的に発展させる」、鳥羽市エコツーリズム推進協議会(2014)の「○市民の理解・参加」などの他団体の課題である。名張市のエコツーリズムでは、観光客と地域住民との関わりが重視されている。エコツアーだけでなく、エコツーリズムの様々な場面における地域住民との関わり、エコツーリズムの地域住民理解度向上のための周知に課題を設け、解決に取り組むことによって、名張市のエコツーリズムの発展につながる。

次に着目した点は情報発信についてである。エコツーリズムの情報発信の方法を表4に整理した。表からわかるように、名張市は他の地域に比べて、市民に対する情報発信についての記載が少ない。他地域のように、情報発信の媒体を明確に記載することによって、具体的な情

報発信のプランが見えやすいと思われる。また、参考にするべき他地域の取組として飯能市エコツーリズム推進協議会（2009）、下呂市エコツーリズム推進協議会（2018）に記載されている「エコツーリズム出前講座」が挙げられる。これは地域住民やNPOなどが主催するエコツアーを増やしていくために、要望に応じて、エコツーリズムの内容やエコツアーの企画方法を説明するものである。エコツーリズム出前講座によるエコツアー数の増加によってツアー参加者も増えエコツーリズムの発展につながると考えられる。

表2 エコツーリズム推進法認定団体の対象地域の人口

	人口（人）
飯能市エコツーリズム推進協議会	80,829
渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会及び座間味村エコツーリズム推進協議会	1,600
谷川岳エコツーリズム推進協議会	20,240
鳥羽市エコツーリズム推進協議会	20,185
名張市エコツーリズム推進協議会	80,619
南丹市美山エコツーリズム推進協議会	4,197
小笠原エコツーリズム推進協議会	2,393
てしかがえこまち推進協議会	7,758
上市まちのわ推進協議会	20,930
愛媛県石鎚山エコツーリズム推進協議会	112,215
串間市エコツーリズム推進協議会	18,915
奄美群島エコツーリズム推進協議会	43,156
檜原村エコツーリズム推進協議会	2,379
下呂市エコツーリズム推進協議会	34,627
赤城山エコツーリズム推進協議会	50,476
阿蘇ジオパーク推進協議会	27,723
吉野川紀の川源流ツーリズム推進協議会	1,313

2015年の国勢調査をもとに作成。

表3 各団体の推進全体構想に示されているエコツーリズム推進における課題

	課題
名張市エコツーリズム推進全体構想（名張市エコツーリズム推進協議会）	①自然環境の保全と地域文化の継承につながるエコツアー ②近年の観光ニーズに対応したエコツアー ③地域と一体となったエコツアー
飯能市エコツーリズム推進全体構想（飯能市エコツーリズム推進協議会）	①参加者やツアー実施者の環境への意識を高めるとともに、自然と保全と文化の継承に役立つツアーを実施する ②より多様で、参加者の満足度が高いエコツアーを増やす ③より多くの住民が関わりながら、エコツーリズムを継続的に発展させる

上市町エコツーリズム推進全体構想（上市まちのわ推進協議会）	ア 持続可能な観光産業の確立 ・自然観光資源の把握及び活用並びに保全の仕組み作り ・ガイド等の人材育成 ・ツアー商品作り及び販売にかかわる仕組み作り イ 本町の観光情報の発信 イ 地域内循環型経済の推進 ・多様な関係者の情報共有・連携の強化等 ・町民及び関係者への啓発及び企画の促進
鳥羽市エコツーリズム推進全体構想（鳥羽市エコツーリズム推進協議会）	○自然観光資源の活用・保全 ○鳥羽ブランドの確立 ○ガイドをはじめとするツーリズムに関わる人々の育成やガイドツアー商品の整備 ○市民の理解・参加
串間市エコツーリズム推進全体構想（串間市エコツーリズム推進協議会）	①自然が身近であるが故の保全の難しさ ②低迷する観光 ③参加体験型観光の推進 ④地域文化と自然環境を継承する担い手の不足（後継者不足と地域の過疎化） ⑤広域でつながる地域連携を目指す
下呂市エコツーリズム推進全体構想（下呂市エコツーリズム推進協議会）	①自然・文化資源の保全に向けた仕組みづくり ②資源の持続的な利用に基づくプログラムづくり ③持続性のあるシステム構築と関係者づくり

各推進全体構想の「推進にあたっての現状と課題」（名張市エコツーリズム推進協議会2014は「現状と課題」）から引用。

表4 各団体のエコツーリズム情報発信の方法

	情報発信の方法
名張市エコツーリズム推進全体構想（名張市エコツーリズム推進協議会）	(1) エコツーリズムについての周知及び理解の促進 ・ウェブサイト等を通じて積極的に情報発信をする。 ・新聞、各種メディアを利用し、市外への普及と啓発に努める。 ・曾爾村（奈良県）の曾爾高原への登山のための観光客及び関係者との情報交流ができる環境を活用した普及啓発。 (2) 市民への情報発信 全体構想や実施プログラム等に関する情報の発信。
飯能市エコツーリズム推進全体構想（飯能市エコツーリズム推進協議会）	①市報 ②エコツアーの案内チラシ ③ホームページ ④マスコミや協力団体の機関誌など ⑤エコツーリズム出前講座 ⑥主務省庁 ⑦その他

上市町エコツーリズム推進全体構想(上市まちのわ推進協議会)	町民が対象 ・上市町ホームページ ・リーフレットの配布 ・広報かみいち 上市町及び周辺地域への旅行を検討している観光旅行者が対象 ・ホームページ(上市町, 上市町観光協会, 富山県, 富山県観光連盟, その他観光関係者) ・マスメディア(テレビ, 雑誌)への情報提供 既に本町を訪れている観光旅行者が対象 ・観光施設, 駅等へのポスターの掲示 ・リーフレットの配布
鳥羽市エコツーリズム推進全体構想(鳥羽市エコツーリズム推進協議会)	①協議会のホームページ ②市報等, 行政機関の広報 ③マスメディアへの情報提供 ④観光関係施設(宿泊施設, 販売店, 交通機関等)への情報提供 ⑤観光関係者のホームページ活用(市, 各実施者, 観光協会等) ⑥エコツーリズムの取組に関するリーフレット等の作成
串間市エコツーリズム推進全体構想(串間市エコツーリズム推進協議会)	・推進協議会の会議について, 原則として公開する。 ・全体構想の作成, 変更, 廃止を行った際は, 串間市や串間市観光協会のHP等で内容を公開する。 ・エコツーリズムの普及を目的として, 市の広報誌やパンフレット, ポスター等を活用しながら, 広く一般にお知らせする。
下呂市エコツーリズム推進全体構想(下呂市エコツーリズム推進協議会)	①市報 ②エコツアーの案内チラシ ③ホームページ ④マスコミや協力団体の機関誌など ⑤エコツーリズム出前講座 ⑥主務省庁 ⑦その他

各団体のエコツーリズム推進全体構想をもとに作成。

続いて着目した点は, エコツーリズムと環境教育との関わりである。名張市エコツーリズム推進協議会(2014)は「環境学習の視点を大切にしたいエコツアー実施にあたっての留意点」の記述を参考にした。その他の4団体

については「環境教育の場としての活用と普及啓発」の記述を参考にした。

各団体のエコツーリズムと環境教育の関わりを表5に整理した。表の①～④は, ①子どもへの環境教育, ②ツアー実施者等の環境教育を行う人々への環境教育, ③地域住民への環境教育, ④地域住民のエコツアーへの関わりを示し, その記述の有無を示した。まず名張市のエコツーリズムと環境教育の関わりで評価できる点は, エコツーリズムを通じてツアー実施者と子どもの両方に環境教育が行われることである。「教育」と聞くと, その対象は子どもと考えがちだが, 環境問題や地域の自然を教えていく立場の人々(ツアー実施者)への講習会実施によって環境教育の質向上に繋がる。また, 高い質の環境教育を受けた子どもが将来教える立場になり, 講習を受けることによってさらに教育の質が向上するというサイクルが生まれる。一方, 課題として地域住民を対象を限定した取り組みがないことが挙げられる。上市まちのわ推進協議会以外の団体の全体構想には「地域住民に対する普及啓発の方法」が示されているが, 名張市には子ども以外の地域住民に対する普及啓発の方法が示されていない。エコツーリズムを通じた環境教育を地域住民が受けることによって, エコツーリズムについての理解が深まるだけでなく, 環境問題や地域の自然への理解・関心が深まる。特に参考にするべき内容は飯能市エコツーリズム推進協議会(2009)と下呂市エコツーリズム推進協議会(2018)にある④の「地域住民がエコツアーに関わる」という内容である。エコツアーに地域住民が関わることによって, エコツーリズムやエコツアーに対する理解・関心が深まるだけでなく, ガイド等から環境教育についても学ぶことができ, 環境問題や地域の自然への理解・関心も深まるという2つの効果が期待できる。

以上のことが, 全体構想の比較によって見えた名張市のエコツーリズムにおける課題である。名張市は地域住民との関わりという点に課題が多く見られる。先でも述べたように, エコツーリズムを推進していく上で, 地域住民のエコツーリズムに対する理解・関心は重要になる。特にエコツーリズムの普及啓発という点において, 他地域の取り組みを参考にしていくことによって効果が

表5 エコツーリズムと環境教育の関わりに関する記述

	名張市	飯能市	鳥羽市	上市町	串間市	下呂市
①子どもへの環境教育	○	○	○	○	×	○
②ツアー実施者等の環境教育を行う人々への環境教育	○	○	○	×	×	○
③地域住民への環境教育	×	○	○	×	○	○
④地域住民のエコツアーへの関わり	×	○	×	×	×	○

○は記述あり, ×は記述なしを示す。各市町のエコツーリズム推進全体構想にもとづき作成。名張市エコツーリズム推進協議会(2014)については「環境学習の視点を大切にしたいエコツアー実施にあたっての留意点」の記述を参考にし, その他の4団体については全体構想の「環境教育の場としての活用と普及啓発」の記述を参考にした。

生まれると考えられる。また、地域住民がエコツーリズムや環境問題、地域の自然への理解・関心を深めることで新たな自発的取り組みが生まれ、エコツーリズムの更なる推進が期待できる。

3. 名張市におけるエコツーリズム

3.1. 地域の概要

名張市は、三重県北西部に位置し、北東に伊賀市、南東に津市、西と南は奈良県に接している。大阪市へ約60km、名古屋市へは約106kmの距離にあり、近畿圏と中部圏の両圏域の結節点に位置している。商業・業務施設の集まる中心市街地を中心に、周囲を山地に取り囲まれた盆地を形成している。周囲の山地には赤目四十八滝などがあり、自然豊かな景勝地に恵まれている。また、名張川をはじめ幾筋もの河川が市内を流れ、四季折々の美しい景観を創出している。さらに能楽の始祖観阿弥が初めて座を興した地域としても知られ、歴史と文化の薫り高い地域でもある。昭和40年以降には、丘陵部を中心に住宅開発が進められ、国道や鉄道沿線には住宅地が分散して形成されている。一方で、山間部では人口減少と高齢化が進み、それに伴う伝統文化の衰退などの問題が生じている。図5に名張市の地区別人口、人口減少率、高齢化率を示した。地区別で見ても人口が減少している地域がほとんどであり、高齢化率も多くの地域が30%以上と高い数値を示している。



図4 名張市（希中央）の住宅地
2020年11月保坂撮影。

3.2. 名張市のエコツーリズム推進に至る経緯

名張市はこれまで、大阪から電車で1時間という交通の便のよさと親しみやすい自然があることから、身近なレクリエーションの場となってきた。しかし、観光客の多くが、自然に負荷を与える一方で、地域や地域住民との関わりがなく帰ってしまう状況が続いている。また、里山開発による、動植物の生息地・生育地の消失、主産業としてきた林業の衰退、商店街の活力低下、山間部の人口減少と高齢化、伝統文化の衰退などの問題が生じている。

一方、地球温暖化や生物多様性への市民の関心が高まる中、各地域に生息・生育していた生物種が棲み続けられるよう、自然を保全・再生していく考えも出てきている。また、観光も体験や交流を通じた心の豊かさを求めるものへのニーズが高まっている。

また、名張市を住所地とする就業者数の推移は、2000年から減少に転じ、産業大分類別では、第一次産業の就業者数が年々減少する一方で、第三次産業への就業者数が年々増加するなど、名張市の自然環境を守り育む環境が厳しくなっている。

このような現状を踏まえ名張市では早くからエコツーリズムに注目し検討重ねてきた。2007年からは赤目四十八滝渓谷保勝会においてエコツアーが開始されている。この赤目四十八滝渓谷保勝会は2005年に設立した、NPO法人の団体である。赤目四十八滝渓谷内の自然環境を保護する事業と、観光客の誘致促進事業を行っており、エコツアーやイベントの企画・実施等で大きな役割を担っている。

2008年に閣議決定した「エコツーリズム推進基本方針」には、「自然環境の保全と自然体験による効果」「地域固有の魅力を見直す効果」「活力ある持続的な地域づくりの効果」が相互に影響し合い、好循環をもたらすことにエコツーリズムを推進する意義があると記載されており、このことからエコツーリズムの推進は名張市の発展・向上に寄与するものと考えられた。

さらに、2009年に策定された「名張市産業振興ビジョン」では、エコツーリズム推進プランを「リーディングプラン」の筆頭に位置づけている。エコツーリズム推進プランでは、先進的な取組を行っている赤目地区を中心に、青蓮寺地区や国津地区など市南部を中心に、様々なメニューの創出に努め、芽吹いたエコツーリズムの流れの充実を図ると定めている。また、2010年に策定された『名張市総合計画「理想郷プラン」後期基本計画』において、「観光」施策の基本方針が「赤目四十八滝、青蓮寺湖、香落溪を観光拠点として位置づけ、自然環境の保全・活用を進めます。また、名張地区の歴史・文化資源をはじめとする新たな観光素材や資源を発掘、創造するとともに、多様な観光資源の連携を強化することにより、観光客のニーズに添った多彩なメニューを整備し、市域全体を魅力ある楽しい観光のまちとして集客の促進を図ります。」「来訪者を温かく迎え、豊かな交流が広がるもてなしの心（ホスピタリティ）の向上に取り組むとともに、利便性の向上や受け入れ体制の整備、マスメディアや旅行会社との連携による効果的な情報発信など、集客交流のための機能を整備して、新しい都市観光を創出します。」「市内の観光拠点と伊賀圏域、東大和西三重地域との広域観光ネットワークを活用し、一体的な観光客誘致戦略のもと積極的な情報発信を行い、広がり

のある広域的観光ゾーンの形成を目指します。」と定められている。そして施策体系の「魅力ある観光地づくり」の中で、新たなニーズへの対応として、滞在型・体験型など多彩な観光メニューの開発とともに、異業種と連携した観光産業やエコツーリズム等、観光の新しい展開を創出すると定めている。

これらの関連計画の基本方針等は、いずれもエコツーリズム推進法及びエコツーリズム推進基本方針の理念と合致し、このようなまちづくりの理念に基づき、名張市では2013年11月17日に「名張市エコツーリズム推進協議会」を設立し、名張市エコツーリズム推進に係る取組を積極的に進めてきた。2年半にわたり名張市エコツーリズム推進全体構想を策定について協議を重ね、2014年7月、全国で5番目にエコツーリズム推進法で名張市エコツーリズム推進協議会（2014）が認定された。

3.3. 名張市がエコツーリズムを推進する目的

名張市ではⅢ(2)で述べたまちづくりの方向性やこれまでの経緯も踏まえ、約1,500万年前の室生火山活動で始まった太古の大地の物語や貴重な動植物が生息する豊かな自然環境の保護に配慮し、万葉の時代から育まれてきた歴史と文化を継承しながら、これらを有効活用することにより、多くの人に心の豊かさや感動を与える旅を提供するとともに、これを地域の活力につなげていくことを目的とし、エコツーリズムを推進している。

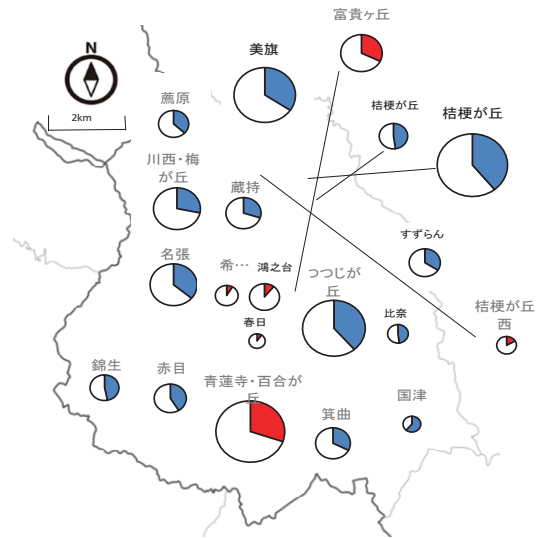


図5 名張市の地区別人口、人口減少率、高齢化率

2020年4月の名張市の町別人口統計表（住民基本台帳および外国人登録者も含む）年齢別人口統計表より作成。人口減少率は2005年から2020年である。地区は市民センターの管轄内で分けられている。円の大きさは人口を表している。円の色は人口減少率を表しており、赤がプラスの値を示し、青がマイナスの値を示している。円内の割合は高齢化率を示している。

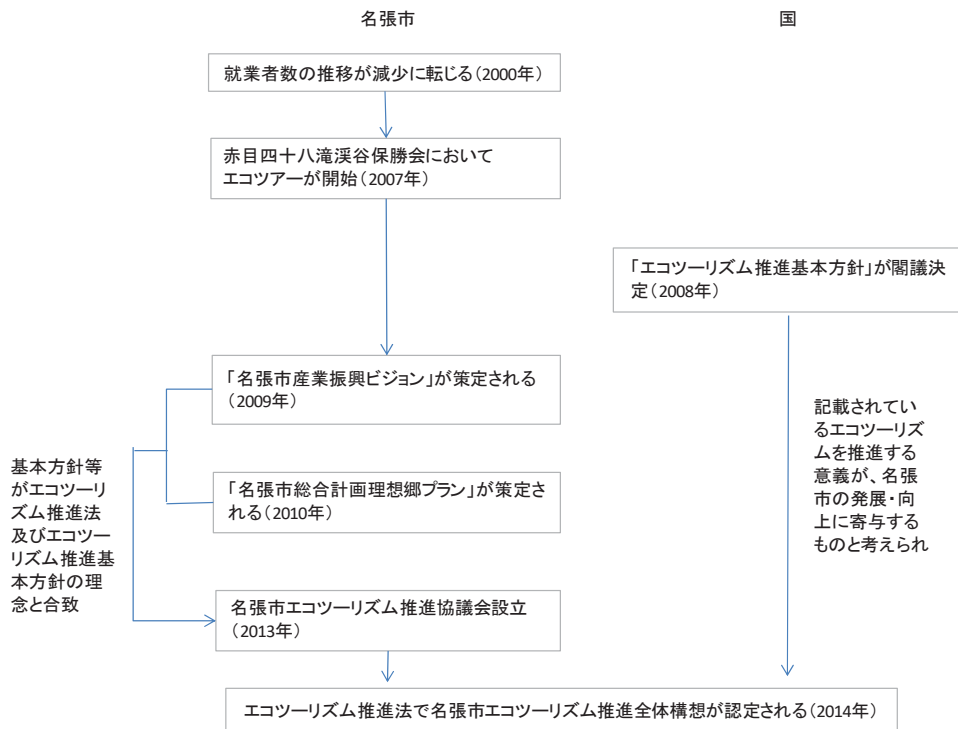


図6 名張市のエコツーリズム推進に至る経緯

名張市エコツーリズム推進協議会（2014）をもとに作成。

3.4. 名張市で行われているエコツアー

名張市エコツーリズム推進協議会（2018）によると行われたエコツアーは、グリーンツーリズムと提携したエコツアー、集落の暮らしや文化を体験するエコツアー、まちなか散策エコツアー、赤目四十八滝渓谷保勝会によるエコツアー、地域作り団体環境や伝統産業団体などによるエコツアーの5種類に分けられる。

表6、図7にエコツアーの種類別体験者数とその割合を示す。グリーンツーリズムと連携した体験型エコツアーは43,704人で、全体のおよそ79%を占める。その内容は「青蓮寺湖ぶどう狩り・いちご狩り」で青蓮寺湖観光村が実施している。集落の暮らしや文化を体験するエコツアーは225人で全体の1%未満である。体験者数の内訳は「豊島区・名張市交流ツアー」が28人、「ホテル鑑賞会ツアー」が83人、「星空観察会」が34人、「鮎つかみ取り体験」が80人となっている。まちなか散策エコツアーは213人で同じく全体の1%未満である。その内容「ふるさとウォークin赤目」で、赤目まちづくり委員会が実施している。赤目四十八滝渓谷保勝会によるエコツアーは8,837人で全体のおよそ16%である。体験者数の内訳は「忍者修行体験」が8,395人、「ちびっこわくわく体験ECOツアー」が304人、「滝に打たれて自分をみがくエコツアー」が138人となっている。地域づくり団体、環境や伝統産業団体などによるエコツアーは約2,495人で、全体のおよそ5%である。体験者数の内訳は、「青蓮寺ダム施設見学会」が約179人、『ふるさと学習「名張学」による景勝地訪問」が約700人、「郷土資料館のオオサンショウウオ見学及び餌やり体験」が700人、「全国自然公園園クリーンデイの実施」が916人となっている。

「グリーンツーリズムと連携した体験型エコツアー」である「青蓮寺湖ぶどう狩り・いちご狩り」の体験者数が全体の体験者数の多くの割合を占めており、次に「赤目四十八滝渓谷保勝会によるエコツアー」の割合が多くなっている。一方でその他の赤目四十八滝渓谷保勝会が実施者として関わっていないエコツアーの参加人数は少なく、新たなエコツアー実施者の参入や、青蓮寺湖観光村、赤目四十八滝渓谷保勝会以外の実施者が行うエコツアーの体験者数増課題であると言える。

地区別のツアー実施数とテーマ（図8）を見ると、錦生、赤目、青蓮寺・百合が丘の3地区以外ではエコツアーが行われていないことがわかる。新たなツアー実施者の参入のためにはエコツアーを実施する地区を拡大していく必要がある。今後は、新たな資源の発掘と、それを活かす方法の検討を継続的に行わなければならない。

表6 名張市の種類別エコツアー体験者数

グリーンツーリズムと連携した体験型エコツアー	43,704
集落の暮らしや文化を体験するエコツアー	225
まちなか散策エコツアー	213
赤目四十八滝渓谷保勝会によるエコツアー	8,837
地域づくり団体、環境や伝統産業団体などによるエコツアー	2,495

名張市エコツーリズム推進協議会（2018）をもとに作成。

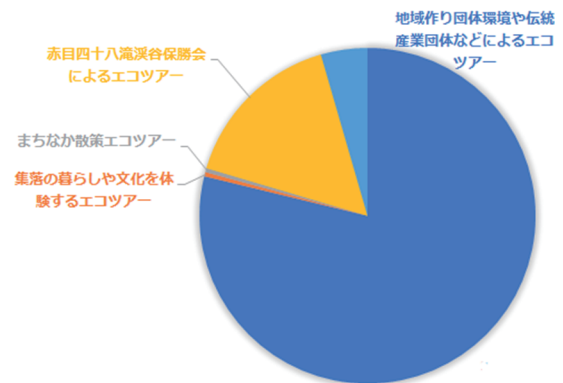


図7 名張市の種類別エコツアー体験者数の割合
名張市エコツーリズム推進協議会（2018）より作成。

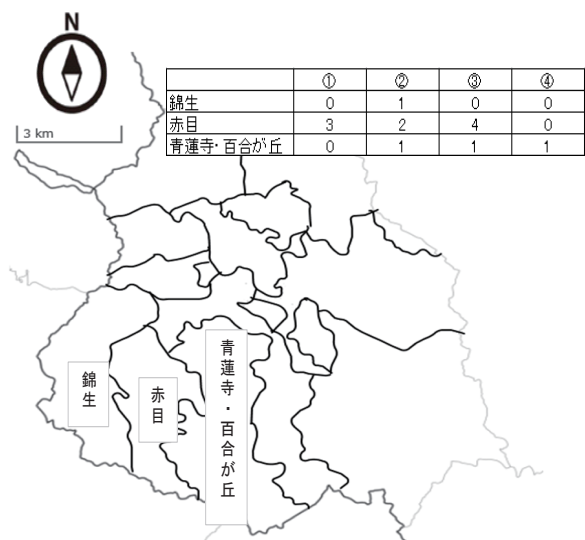


図8 名張市における地区別のエコツアー数とテーマ
名張市エコツーリズム推進協議会（2018）、地理院地図より作成。①が「赤目四十八滝渓谷保勝会によるエコツアー」、②が「地域づくり団体、環境や伝統産業団体などによるエコツアー」、③が「集落の暮らしや文化を体験するエコツアー」、④が「グリーンツーリズムと連携した体験型エコツアー」となっている。

3.5. エコツアーの企画及び実施過程

名張市のエコツアーは、実施者と推進協議会、専門家等の連携により行われる（図9）。実施場所は室生赤目青山国定公園及赤目一志峡県立自然公園（赤目四十八滝、香落谷、青蓮寺）である。名張市エコツーリズム推進協議会（2014）では、エコツアーにおいて①ツアー参加者の安全②自然（自然観光資源）の保全③地域住民の生活環境及び史跡等の保護④環境全般⑤ツアーの質、を保護するためにルールが定められており、ツアー実施者、ガイド、関係団体が、このルール及び関係法令等を守るように取り組むとされている。推進協議会は、このルールのチェックリストを作成し、ツアー実施者がチェックできるようにする。参加者の募集後、ツアーが実施されるが、その際、ツアーで活用される自然観光資源についてモニタリングを行う。モニタリングの対象は、動植物、生息地・生育地、森林環境、河川環境、その他の自然観光資源である。このうち、生息地・生育地についてのモニタリングの主体は専門家であり、それ以外の主体はツアー実施者である。専門家はモニタリングの結果から、必要に応じて改善方法の提案を行い、ツアー実施者は把握した自然観光資源の変化や問題点をエコツーリズム推進協議会事務局に報告する。これらの提案、報告をエコツーリズム推進協議会事務局がとりまとめ推進協議会に報告し、承認後、ツアー実施者に対してエコツーリズム推進協議会事務局が周知・指導を行いツアー実施方法の改善を図っていく。このように、エコツアーの企画及び実施過程のサイクルができており、推進協議会や専門家等の協力も得られるため、新たな実施者も参入しやすい環境となっている。

4. 名張市のエコツーリズムに対する関係者の意識

4.1. 住民のエコツーリズムに対する認識

聞き取り調査により、名張市のエコツーリズムに対する認識の調査を行った。調査地域は名張市で、無作為に地域住民50人に対して行った。質問項目は「性別」「年齢」「職業」「エコツーリズムという言葉を知っているか」「名張市のエコツーリズムの内容を知っているか」である（表7）。

調査の結果、エコツーリズムという言葉を知っている人のほとんどは、赤目四十八滝周辺で勤務する方々で、その中には90代の方もおり、年齢に関係なく知られていると言える。No.14の赤目四十八滝周辺のホテルに勤務する男性は「知っていて当然」と答え、エコツーリズムを目的として訪れる観光客の宿泊が多いため、名張市出身ではない従業員も含め、すべての従業員が名張市のエコツーリズムの内容を知っていると話した。このように、赤目四十八滝を訪れる観光客との関わりの中で、エ

コツーリズムという言葉を理解していくケースが多いと考えられる。

また、赤目四十八滝周辺に勤務する方以外で、エコツーリズムという言葉を知っていると答えたのはわずか6人であった（表1 網掛け部分）。No.2の男性は、エコツーリズムという言葉を知っていると答え、こちらからエコツーリズムについて説明した後、「他地域にも誇れる観光資源は赤目四十八滝しかない」と答えており、エコツーリズムの認識以前に、エコツーリズムの対象となっている資源に魅力を感じていないケースも見られた。

しかし一方で、No.8、13、28のように30、40代の比較的若い年齢の方がエコツーリズムという言葉を知っている。その中でもNo.8の男性は、新聞でエコツーリズムという言葉を見かけ興味を持って調べたという。エコツーリズムという言葉の意味は知らないが見たことや聞いたことがあると答えたNo.5の80代女性、No.25の60代女性はいずれも、市の広報誌で見かけたと答えた。

名張市のエコツーリズムの内容を知っているのが5人しかおらず、うち4人が赤目四十八滝周辺で勤務している点からもわかるように、観光客との関わりが少ない人のエコツーリズムに対する認識度や関心は低い。しかし、エコツーリズムという言葉を見かけ興味を持つ若年層もいることから、名張市のエコツーリズムのさらなる周知が必要と言える。

4.2. 「幽玄の竹灯」から見るエコツーリズムの課題

「幽玄の竹灯」は、赤目四十八滝渓谷保勝会が2019年からエコツーリズムの取組として位置付けて実施しているイベントである。秋・冬季の赤目四十八滝渓谷の魅力向上による集客を目的としており、2020年度は2020年10月24日から2021年1月31日までの16時30分から20時に行われた。開催エリアは、メインエリアが日本サンショウウオセンターから不動滝、サブエリアが赤目自然歴史博物館から日本サンショウウオセンターである（図10）。入場料は大人600円、子ども300円（赤目四十八滝渓谷入山料を含む）である。地元の竹灯作家「竹雀」の作品を中心に約1,000本の竹灯が渓谷を照らし、大型LED照明のライトアップとともに秋冬の渓谷を彩る（図11）。苔むした渓谷や流れ落ちる滝を背景に、幻想的で温かみのある光で照らす竹灯や、竹灯の手作り体験が魅力となっている。

竹灯とは、竹の表面に様々な模様の切り込みを入れ、竹の内側からライトアップしたものである（図12）。赤目四十八滝渓谷保勝会ゼネラルマネージャーへの聞き取りによると、竹灯で用いられる竹は、名張市内の放置された竹林のものである。近年、竹林の放置による他の生態系の破壊を防ぐため、竹林を伐採するケースが増えている。伐採した竹を再利用し、地域の資源を活用すると

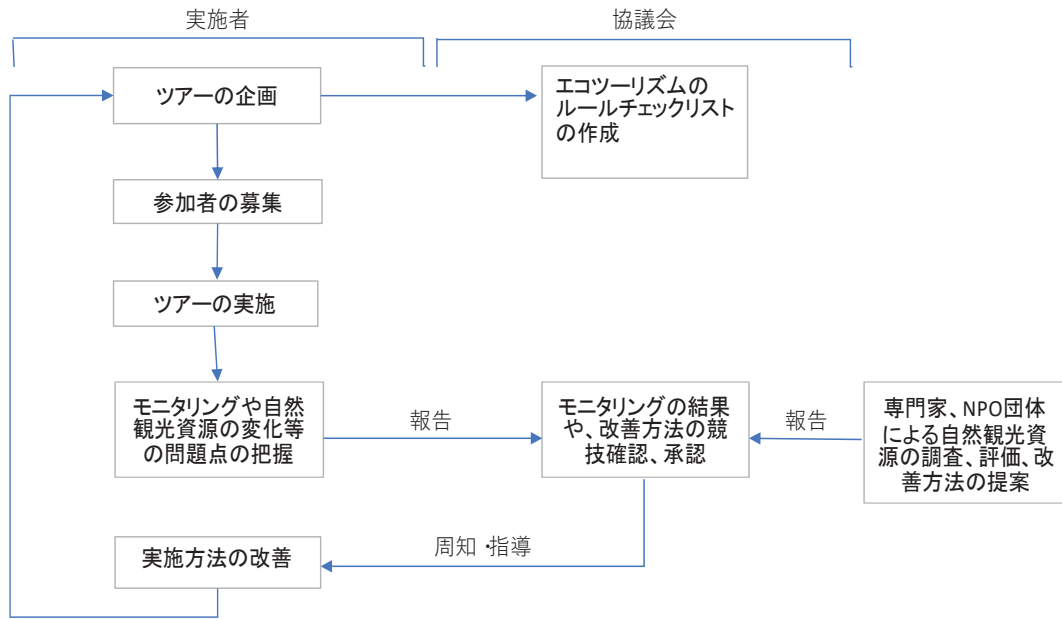


図9 名張市におけるエコツアーの実施過程

名張市エコツーリズム推進協議会（2014）の「IV エコツーリズム実施の方法」より作成。

表7 名張市における住民のエコツーリズムに対する認識

No	年齢(歳代)	性別	職業	エコツーリズムという言葉を知っている	名張市のエコツーリズムの内容を知っている
1	30	男	g	×	×
2	30	女	a	○	×
3	30	女	a	×	×
4	30	女	g	×	×
5	30	女	g	×	×
6	40	女	b	×	×
7	40	男	g	○	×
8	40	女	a	○	○
9	40	男	g	×	×
10	40	男	d	×	×
11	40	男	a	×	×
12	40	女	e	×	×
13	40	女	g	×	×
14	40	男	b	×	×
15	40	女	a	×	×
16	50	男	b	×	×
17	50	女	g	×	×
18	50	女	g	×	×
19	50	男	e	○	○
20	50	女	e	○	×
21	50	女	g	×	×
22	50	男	d	○	×
23	60	男	f	×	×
24	60	女	f	×	×

25	60	男	f	△	×
26	60	男	f	○	×
27	60	男	a	×	×
28	60	男	a	×	×
29	60	男	a	×	×
30	60	女	b	×	×
31	60	男	e	○	○
32	60	女	e	○	○
33	60	女	f	△	×
34	60	女	f	×	×
35	60	男	c	×	×
36	60	男	a	×	×
37	60	男	c	○	×
38	70	男	e	○	×
39	70	女	e	○	○
40	70	女	f	△	×
41	70	女	f	△	×
42	70	男	f	×	×
43	70	女	f	×	×
44	70	男	f	×	×
45	80	女	f	△	×
46	80	男	b	×	×
47	80	女	e	○	×
48	80	女	f	×	×
49	80	女	f	×	×
50	90	女	e	○	×

職業のaは会社員，bは自営業，cは農業，dは林業，eは赤目四十八滝周辺のホテル，土産店等勤務，fは無職，gはその他を示す。「エコツーリズムという言葉を知っている」の○は「エコツーリズムという言葉の意味を知っている」，△は「見たこと，聞いたことはあるが言葉の意味は知らない」，×は「全く知らない」を示す。



図10 「幽玄の竹灯」開催エリア

緑矢印部分が開催エリア。国土地理院地図を用いて作成。

共に、地域の人々と協力し竹林を整備している。それが、「幽玄の竹灯」のエコツーリズムとしての位置づけにつながっている。

ここでは、赤目四十八滝溪谷保勝会が実施した、「幽玄の竹灯」を見学した観光客へのアンケート調査と、保坂が2019年12月25日と2020年1月7日に「幽玄の竹灯」に参加した経験から、名張市のエコツーリズムの課題を明らかにする。

アンケートは、赤目四十八滝溪谷保勝会が2020年11月10日から2020年12月17日にかけて「竹灯り2020アンケート」と題し、「幽玄の竹灯」の見学に訪れた観光客に対して行ったものである。回答数は355で、アンケート項目は1.性別、2.年齢、3.出身、4.「幽玄の竹灯」に来たきっかけ、5.「幽玄の竹灯」開始前に赤目四十八滝を散策したか、6.「幽玄の竹灯」の規模は満足できるものだったか、7.「幽玄の竹灯」の入場料はどうか、8.会場のコロナ対策はどうか、9.周辺環境（店舗・駐車場）はどうか、10.来年も竹灯を見に訪れたいと思うか、11.来年の開催に向けた意見、となっている。この中から「幽玄の竹灯」以外のエコツーリズムやエコツアーとの関連がある4.「幽玄の竹灯」にきたきっかけ、5.「幽玄の竹灯」開始前に赤目四十八滝を散策したか、9.周辺環境（店舗・駐車場）はどうか、に着目する。

図13に設問「4.『幽玄の竹灯』にきたきっかけ」の結果を示す。「家族、友人、知人の紹介」が最多だが、次に「ホームページ」「SNS」の順で割合が多くなってい

る。このことから、エコツーリズムの活動内容の周知にはホームページやSNSを有効活用することで効果が期待できる。「幽玄の竹灯」以外のイベントや活動でも、口コミで情報が広まることを期待するだけでなく、様々なメディア・媒体を通して発信していくことが必要である。

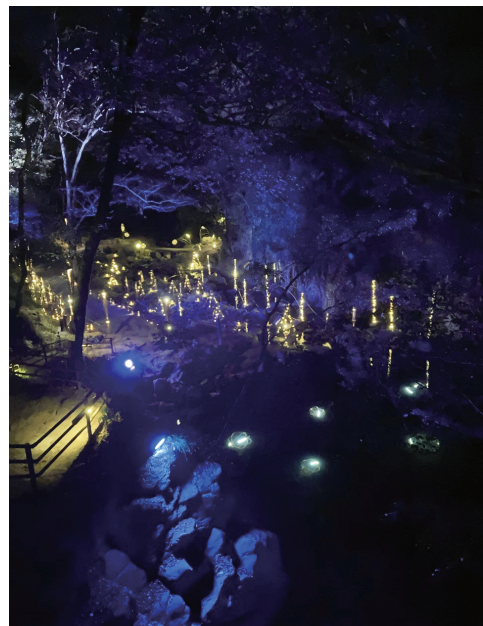


図11 「幽玄の竹灯」の様子

2021年1月7日 保坂撮影



図12 「幽玄の竹灯」で使用される竹灯
2020年1月7日 保坂撮影

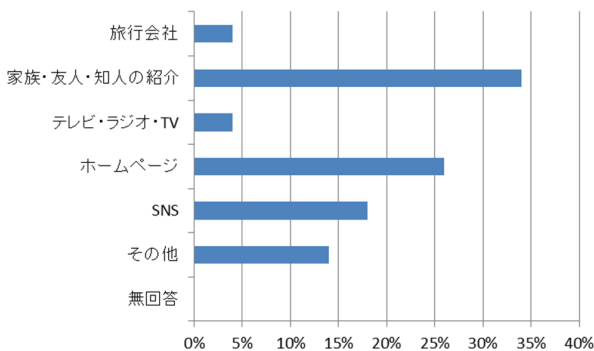


図13 「幽玄の竹灯」に来たきっかけ
竹灯り2020アンケートより作成。

設問「5.『幽玄の竹灯』開始前に赤目四十八滝を散策したか」では、約70%が「幽玄の竹灯」開始前に赤目四十八滝を散策したことが分かり、赤目四十八滝散策が目的ではなくても、空いた時間を利用して散策する人が多いことが予想される。このようにエコツアー以外にも、観光客が名張市の自然観光資源に触れる機会をイベントによって作り出すことが可能である。今後新たなイベントを実施する際は、観光客が参加すると共に自然観光資源の魅力発見に繋がるようなものにしていく必要がある。

図14に「9.周辺の環境（店舗・駐車場）はどうか」の結果を示す。多くの人が「満足」「やや満足」と答えており「やや不満」「不満」と答えた人の割合は合わせて20%以下である。このことから、名張市のエコツアー推進の中心箇所である赤目四十八滝の周辺の環境には課題が見られず、観光客を受け入れる体制が十分に整っていると言える。

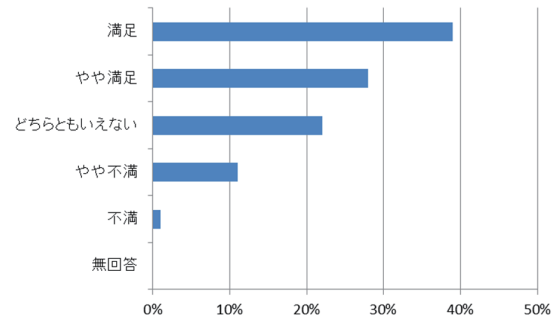


図14 周辺の環境（店舗・駐車場）をどう感じたか
竹灯り2020アンケートより作成

保坂は「幽玄の竹灯」に2020年12月25日と2021年1月6日の2回参加した。第一に課題として挙げられることは、イベントを実施している時間帯での、アピール不足である。保坂が参加した日は平日ということもあり、周辺の商店は営業しておらず、イベント実施エリアまで明かりが少なかった。イベントが実施されているか、不安になってしまう観光客も多いことが予想される。また「幽玄の竹灯」について知らない人が、イベントの実施に気づくことは非常に難しい。この課題解決のためには、実施エリア以外でのイベント内容のアピールが必要である。例えば、「幽玄の竹灯」のポスターが貼られている近鉄赤目口駅に、竹灯を展示するだけでもイベントが実施されていることがわかる。

第二に「幽玄の竹灯」の実施過程の説明不足が課題として挙げられる。先にも述べたように、竹灯製作には地元の竹灯作家「竹雀」が関わっており、用いる竹の伐採には地域住民が協力している。しかし、これらについて説明した看板等は赤目四十八滝溪谷内や周辺にも見られない。赤目四十八滝溪谷保勝会のホームページ上では「竹雀」について触れられているが、その他の地域住民の関わりについては触れられていない。看板設置等、エコツーリズムに地域住民が関われることを発信していく必要がある。当然、イベントにはエコツーリズムについての知識がない地域住民も訪れる。そういった地域住民がエコツーリズムについて知り、自分も関わろうと考えるケースも生まれるだろう。

以上が「幽玄の竹灯」から見るエコツーリズムの課題である。「竹灯り2020アンケート」と保坂の経験から、イベント内容やイベントと関連した名張市の魅力の周知に課題が多く見られた。この課題を解決していくために周知する情報と手段を拡大する必要がある。今までは、イベントの内容のみを周知しているが、実施過程など様々な情報を周知することで様々な視点から名張市のエコツーリズムに興味を持つ人が増える。また、周知に多くのメディア・媒体等の手段を用いることで、より効率的に名張市のエコツーリズムを周知することができる。

表9 名張市のエコツーリズムの課題に対する関係者の認識

No	年齢	出身地	所属団体	項目1	項目2
1	50代	名張市以外	名張市エコツーリズム推進協議会	×	×
2	50代	名張市以外	名張市エコツーリズム推進協議会	○	○
3	50代	名張市	名張市エコツーリズム推進協議会	○	○
4	50代	名張市	赤目四十八滝溪谷保勝会	○	○
5	70代	名張市	名張市エコツーリズム推進協議会	×	×

項目1は「名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示されている①自然環境の保全と地域文化の継承につながるエコツアー②近年の観光ニーズに対応したエコツアー③地域と一体となったエコツアー、の課題について解決されたと思うか」、項目2は「名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示されていない新たな課題は生まれたか」である。項目1で「解決した」と答えた場合は「○」、解決していない場合は「×」としている。項目2で「生まれた」と答えた場合は「○」、「生まれていない」と答えた場合は「×」としている。

4.3. 名張市エコツーリズム推進協議会、赤目四十八滝溪谷保勝会の人々の考え

アンケート調査により、名張市エコツーリズム推進協議会および赤目四十八滝保勝会の人々のエコツーリズムに対する考えを把握した。対象は名張市エコツーリズム推進協議会（2014）を作成する以前から実際に地元でエコツーリズムに携わっている名張市エコツーリズム推進協議会委員4名と、赤目四十八滝溪谷保勝会のゼネラルマネージャー1名である。このアンケートでは、1.「名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示されている①自然環境の保全と地域文化の継承につながるエコツアー②近年の観光ニーズに対応したエコツアー③地域と一体となったエコツアー、の課題について解決されたと思うか」、2.「名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示されていない新たな課題は生まれたか」、3.「項目1, 2を踏まえた上で、今後名張市のエコツーリズムを推進していくために、どのようなことが必要と考えるか」の3項目について考えを聞いた。

表に対象者と項目1, 2について整理した。項目1は「解決した」と答えた場合は「○」、解決していない場合は「×」としている。項目2は「生まれた」と答えた場合は「○」、「生まれていない」と答えた場合は「×」としている。

表9から、項目1で「解決した」と答えたNo2, 3, 4は3人も項目2で「生まれた」と答えたことがわかる。また項目2で「解決していない」と答えたNo1, 5は2人も項目2で「生まれていない」と答えたことがわかる。これらのことから、エコツーリズム推進の中心となる人々の中で、名張市のエコツーリズムの現状に対する認識に違いがあると言える。

No2, 3, 4の3人は名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示されている課題は解決したと考え、その上で自分の経験や考えを加えて新たな課題を見出している。No2は項目1について、ホテル鑑賞会や忍者修行体験といった具体的なエコツアーの内容を示した上で解決

したと答えた。また項目2について、新たな課題として「インバウンドを含む多様な旅行者のニーズに沿った体験ツアーの開発」を挙げた。同様にNo3, 4も項目1については解決したとし、項目2ではNo3が「一定の収益を確保し自立した運営をできる組織づくり」、No4が「地域の人々の考えを把握した上でエコツーリズムの取り組みを行うこと」を新たな課題として挙げている。これらのことからNo2, 3, 4の3人は、名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示された課題は解決したため、更なるエコツーリズム推進に向けた課題を見出していることは共通している。しかし、3人の考える新たな課題の対象・方向性は異なり、考え方の違いが見られる。

一方、No1, 5は項目1で解決していないとし、項目2で新たな課題も生まれていないとしている。No1は項目2で「新たな課題の発見よりも、今ある課題の解決が優先」と述べている。No5は項目2について解決していないとした以外の回答はなかった。しかし、項目1では全体構想に課題として示されている3つのエコツアーを実施するに当たって交通網の整備が不十分だとしている。このことから、2人はエコツーリズム推進のためには、まず名張市エコツーリズム推進協議会（2014）に示された課題を解決することが優先と考えていることがわかる。

これらのエコツーリズムの現状に対する認識の違いが生まれるのは、1人1人が考える、エコツーリズム推進の核となる部分が異なるからである。このことはNo3, 4, 5の間で、考える新たな課題の対象・方向性が違うことからわかる。エコツーリズム推進の核となる部分が異なるということは、名張市のエコツーリズムに対して様々な角度から意見が生まれるということである。よって、各団体でエコツーリズムに対しての考えを1つに絞るのではなく、1人1人の考えを尊重する環境をつくることでエコツーリズムの更なる推進が期待できる。

表10 関係者が考える今後のエコツーリズム推進における必要事項

No	出身地	項目3
1	名張市以外	積極的な周知により、市民がエコツーリズムを自分事として捉え、地域が一体となった展開を図ること
2	名張市以外	異業種間の連携深化による、地域を生かした新しい価値創造
		「自然体験に「食」「泊」を組み合わせた滞在交流の促進
		子どもたちの健全な心身の育成と自然を生かす力や守り育てる意識の醸成
		事業連携を促進するネットワークの連携強化
		地域全体で交流を深めるための活動をコーディネート・マネジメントできる人材育成
3	名張市	フルタイムでエコツーリズムに従事することのできる出来る労働環境・条件を整えること
4	名張市	多様なニーズに応えるため、地域の資源をエコツーリズムのコンピテンツとして整備すること
5	名張市	観光客が移動手段に困らないための交通整備

No1～5は表9と対応している。項目3は「項目1, 2を踏まえた上で、今後名張市のエコツーリズムを推進していくために、どのようなことが必要と考えるか」である。複数回答可としている。

続いて、表10に項目3について整理した。網掛け部分は回答において、地域住民との関わりが示されている箇所である。名張市出身以外のNo1, 2に地域住民との関わりについての内容があることがわかる。No1は「エコツーリズムの市民への積極的な周知により、市民がエコツーリズムを自分事として捉え、地域が一体となった展開を図ることが重要」とし、エコツーリズムの周知の重要性を強調している。No2は複数回答が見られるが「子どもの健全な心身の育成と自然を守り育てる意識の醸成」「地域全体で交流を深めるための活動をコーディネート・マネジメントできる人材の育成」の2点から、幅広い年代のエコツーリズムへの関わりと、それを行うための人材育成を重視していることがわかる。

一方、名張市出身のNo3, 4, 5の回答には地域住民との関わりについての内容が見られない。No3は「フルタイムでエコツーリズムに従事することのできる労働環境、条件を整えること」としていることから、エコツーリズム推進を行う関係団体に焦点を当てていることがわかる。No4は「多様なニーズに応えるため、地域の資源をエコツーリズムのコンピテンツとして整備すること」とし、No5は「観光客が移動手段に困らないための交通整備」とした。この2名は共に、名張市の資源や観光に焦点を当てていることがわかる。

先にも述べたように、名張市のエコツーリズムでは、地域住民のエコツーリズムへの関わりが必要とされている。そのため、今後エコツーリズムを推進していく上で、地域住民に係る取り組みが挙げられないことは問題である。名張市以外出身のNo1, 2は自分が生まれ育った場所ではないため、地域住民に対する先入観が無く現状を捉えられていると考えられる。名張市出身のNo3, 4, 5も地域住民に対する先入観を捨て、1から地域住民の現状を捉え直すべきである。その上でNo3, 4, 5のような考えも取り入れ、地域住民がエコツーリズムに

関わりやすい環境をつくっていくとよいと考えられる。

5. おわりに

本研究の目的は、名張市のエコツーリズムにおける課題と可能性を明らかにすることであった。全国のエコツーリズム推進法認定団体間の比較・検討や、名張市における地域住民、関係団体、エコツアーの調査から、大きな課題が2点明らかになった。

第一は、地域住民の関わりである。名張市のエコツーリズムにおいて地域住民の参加は必須である。しかし、名張市エコツーリズム推進協議会（2014）では地域住民がエコツーリズムに参加しやすい環境を生み出す取り組みが不足していた。また、関係団体の委員の中でも、地域住民に対する視点を持つ人は限られていた。このような状況では、地域住民が名張市のエコツーリズムに理解を示すことは難しいだろう。一方で、全体構想や関係団体の委員によって、子どもから大人まで幅広い年代の地域住民に視点が当てられていることは評価できる。今後は、幅広い年代への視点を保ちながら、取り組みを充実させていくことが必要である。また、エコツアーが行われていない地区の地域住民はエコツーリズムに触れる機会が特に少ない。地区外の住民が関わることのできる取り組みも必要である。

第二は、エコツーリズムの周知である。周知方法については、エコツーリズムについて知っている地域住民が少ないことから、普段何気ない場所で「エコツーリズム」という言葉を見かけるような取り組みが必要である。周知内容については、より具体的にする必要はある。ただ、イベントや行事の概要を示すだけではなく、実施に至るまでの経緯や、そのイベントや行事を通じて学んでほしいことを示すことで、地域住民や観光客のエコツーリズムに対する興味・関心が深まるだろう。

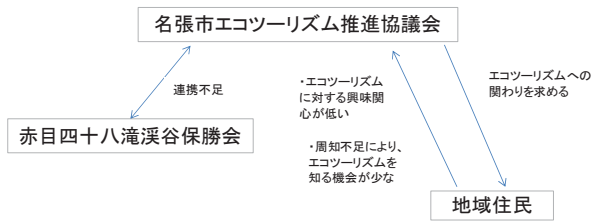


図15 名張市のエコツーリズムに関わる主体の関係

そこで、これらの課題解決のために、関係者間の連携強化を提案して本稿を閉じたい。図15に、この研究で明らかになった、名張市のエコツーリズムに関わる主体の関係を示す。ここからは、関係団体と地域住民の関係が一方通行になっていることがわかる。地域住民の声をエコツーリズムに反映させるためにも、まずは地域住民のエコツーリズムに対する考えや認知度などの実態を明確にしなければならない。

そのために必要なのが、名張市エコツーリズム推進協議会と赤目四十八滝溪谷保勝会の協働の取り組みである。名張市エコツーリズム協議会（2014）は、名張市エコツーリズム推進協議会によって作成されたものであるが、赤目四十八滝溪谷保勝会ゼネラルマネージャーは聞き取り調査において「全体構想に、赤目四十八滝溪谷保勝会の考えがあまり反映されていない」と述べていた。このことから、連携不足がわかる。名張市エコツーリズム推進協議会には赤目四十八滝溪谷保勝会理事長も参加している。名張市エコツーリズム推進協議会（2014）において、名張市エコツーリズム推進協議会での参加者の役割として「エコツーリズム推進にあたっての助言・指導」「エコツアーの企画、周知、実施にあたっての統括・調整など」「エコツアーへの協力、情報提供・助言」「事務局」が示されている。このうち、赤目四十八滝溪谷保勝会理事長の役割は「エコツアーの企画、周知、実施にあたっての統括・調整など」のみである。理事長以外の赤目四十八滝溪谷保勝会委員も名張市エコツーリズム推進協議会に参加し、理事長とは別の役割を担うことで、名張市エコツーリズム推進協議会と赤目四十八滝溪谷保勝会の連携が深まると考えられる。

具体的な取り組みとしては、第一に地域住民との関わりについて、両団体委員による会議等で情報共有をしていくことである。理事長以外の赤目四十八滝溪谷保勝会委員の意見を名張市エコツーリズム推進協議会が取り入れることで、これまで以上に地域住民の視点を生かしたエコツーリズム推進が可能になると考えられる。第二にエコツーリズムの周知について、両団体でSNSアカウントを共同運用してはどうか。エコツーリズムについて知識のない地域住民、特に若い世代がエコツーリズムに興味を持つきっかけになる。各団体が、別の角度からの情

報を同じアカウントから発信していくことで、両団体の関係者も地域住民もこれまで気づかなかった名張市の魅力を見つめなおすことができると思われる。

文献

- 赤城山エコツーリズム推進協議会（2018）：『赤城山エコツーリズム推進全体構想』、赤城山エコツーリズム推進協議会
- 赤目四十八滝溪谷保勝会（2020）：『竹灯り2020アンケート』、赤目四十八滝溪谷保勝会
- 浅野敏久（2002）：宮島におけるエコツーリズムの試み、地理科学, 57-3, 194-207
- 阿蘇ジオパーク推進協議会（2019）：『阿蘇エコツーリズム推進全体構想』、阿蘇ジオパーク推進協議会
- 奄美群島エコツーリズム推進協議会（2017）：『奄美群島エコツーリズム推進全体構想』、奄美群島エコツーリズム推進協議会
- 石原俊・小坂亘・森本賀代・石垣篤（2010）：小笠原諸島のエコツーリズムをめぐる地域社会の試行錯誤—「南島ルール」問題を中心に—、首都大学東京 小笠原研究年報, 33, 7-25
- 市田飛鳥・林浩二・細谷夏実（2005）：エコツーリズムにおける地域環境保全の役割—沖縄県・石垣島におけるWWFしらはサンゴ村体験ツアーを事例として—、大妻女子大学紀要—社会情報系— 社会情報学研究, 14, 141-155
- 上市まちのわ推進協議会（2016）：『上市町エコツーリズム推進全体構想』、上市まちのわ推進協議会
- 愛媛県石鎚山エコツーリズム推進協議会（2017）：『石鎚山系エコツーリズム推進全体構想』、愛媛県石鎚山エコツーリズム推進協議会
- 小笠原エコツーリズム協議会（2016）：『小笠原村エコツーリズム推進全体構想』、小笠原エコツーリズム協議会
- 川崎興太・三部和哉（2015）：エコツーリズムとエコツーリズム地域推進組織の実態と問題点—エコツーリズム地域推進組織に対するアンケート調査とヒアリング調査の結果を踏まえて—、公益社会法人日本都市計画学会 都市計画論文集, 50-1, pp61-68
- 環境省（2008）：『エコツーリズム推進基本方針』、環境省
- 串間エコツーリズム推進協議会（2017）：『串間エコツーリズム推進全体構想』、串間エコツーリズム推進協議会
- 下呂市エコツーリズム推進協議会（2018）：『下呂市エコツーリズム推進全体構想』、下呂市エコツーリズム推進協議会
- 佐山浩・西田正憲（2000）：屋久島のエコツーリズムの近年の動きとその特徴、ランドスケープ研究, 63-5, 749-752
- 敷田麻実・森重昌之（2011）：『地域資源を守っていかすエコツーリズム』、講談社, pp47-102
- 敷田麻実・森重昌之（2003）：持続可能なエコツーリズムを地域で創出するためのモデルに関する研究、日本観光研究学会機関紙, 15-1, pp1-10
- 宋多情（2017）：奄美大島におけるエコツーリズムの受容プロセス、島嶼研究, 18-1, 35-54
- 谷川岳エコツーリズム推進協議会（2012）：『谷川岳エコツーリズム推進全体構想』、谷川岳エコツーリズム推進協議会
- てしかがえこまち推進協議会（2016）：『てしかがえこまち推進協議会エコツーリズム推進全体構想』、てしかがえこまち推進協議会
- 渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会・座間味村エコツーリズム推進協議会（2012）：『慶良間地域エコツーリズム推進全体構想』、渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会・座間味村エコツーリズム推進協議会
- 鳥羽市エコツーリズム推進協議会（2014）：『鳥羽エコツーリズム推進全体構想』、鳥羽市エコツーリズム推進協議会

- ム推進全体構想』, 鳥羽市エコツーリズム推進協議会
- 中井達郎 (2002): 『地域にとってのエコツーリズム—小笠原での試みと課題—』, 地理科学, 57-3, 187-193
- 中岡裕章 (2018): 『埼玉県飯能市におけるエコツーリズムの意義と問題点—エコツアー実施者の参画意識に着目して—』, 地理学評論 91-2, 146-161
- 名張市 (2009): 『名張市産業振興ビジョン』, 名張市
- 名張市 (2010): 『名張市総合計画「理想郷プラン」後期基本計画』, 名張市
- 名張市 (2019): 『名張市観光戦略 [2019改定版]』, 名張市
- 名張市エコツーリズム推進協議会 (2014): 『名張市エコツーリズム推進全体構想』, 名張市エコツーリズム推進協議会
- 名張市エコツーリズム推進協議会 (2018): 『平成30年度事業報告』, 名張市エコツーリズム推進協議会
- 名張市エコツーリズム推進協議会 (2018): 『令和元年度事業計画』, 名張市エコツーリズム推進協議会
- 南丹市美山エコツーリズム推進協議会 (2014): 『南丹市美山エコツーリズム推進全体構想』, 南丹市美山エコツーリズム推進協議会
- 飯能市エコツーリズム推進協議会 (2009): 『飯能市エコツーリズム推進全体構想』, 飯能市エコツーリズム推進協議会
- 檜原村エコツーリズム推進協議会 (2018): 『檜原村エコツーリズム推進全体構想』, 檜原村エコツーリズム推進協議会
- 平井純子 (2018): 『里地里山型エコツーリズムの行方—埼玉県飯能市を事例に—』, 駿河台大学論叢, 56, 83-94
- 真坂昭夫・石橋秀三・海津ゆりえ (2011): 『エコツーリズムを学ぶ人のために』, 世界思想社, 14-32
- 松永光雄 (2015): 『エコツーリズムにおける地域再生—木で囲まれた安全・安心で豊かなまちづくり—』, 法政論叢, 51-2, pp1-13
- 森重昌之・高木晴光・宮本英樹 (2008): 『地域からのエコツーリズム—観光・交流による持続可能な地域づくり—』, 学芸出版社, pp29-62
- 山崎真之 (2016): 『揺れ動くホストとゲスト—エコツーリズムと小笠原新島民の生活実践をめぐって—』, 観光学評論, 4-2, 107-119
- 宮内久光 (2003): 『沖縄県におけるエコツーリズムに関する基礎的研究』, 人間科学, 11, 83-121
- 吉田春生 (2003): 『エコツーリズムとマストツーリズム—現代観光の実像と課題—』, 大明堂, pp9-15
- 吉野川紀の川源流ツーリズム推進協議会 (2019): 『吉野川紀の川源流ツーリズム推進全体構想』, 吉野川紀の川源流ツーリズム推進協議会